

課題 「10 年後の家」

この 50 年の間に、わたしたちの住まい方や建築のつくり方は大きく変わりました。わたしたちは未来を考えると、その風景を漠然とイメージしています。しかし、10 年後と想定すると急にリアリティが高まるのではないのでしょうか？

10 年という時間のスパンには、AI などの技術進化を前提にすると加速度的な変化が考えられそうです。あるいは、もしかすると現在とさほど変わらないのかもしれませんが。

20 歳なら 30 歳、30 歳なら 40 歳……です。そうとらえると 10 年のスパンは大きな意味を持つことでしょう。

今回、これからの新しい建築「10 年後の家」を創造してみてください。きっとリアルな提案が見えてくるはずです。

計画条件

- ・北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

表彰(賞金)

50 回記念として、知事賞、主催者会長賞で表彰

- ・北海道知事賞 1 点
(最優秀賞の副賞として、主催者より 賞金 30 万円)
- ・北海道建築士事務所協会会長賞 2 点
(優秀賞の副賞として、主催者より 賞金 10 万円)
- ・奨励賞 4 点
(奨励賞の副賞として、主催者より 賞金 2 万円)

参加資格

- ・一般、学生等を問いません。
- ・北海道内居住者とし、(学生・生徒は北海道内の大学等に在籍している者に限ります)。
- ・個人参加、グループ参加は自由です。

提出物

- (1) 図面
設計趣旨及び設計意図を表現する図面(縮尺は自由)。図面には、氏名、記号などを記入しないでください。
A1 (841 × 594) サイズ一枚、横づかい(縦づかいは無効です)。表現は自由です。
ハレパネ又はスチレンボード(厚さ 5 mm 程度)などでパネル化してください。表面の貼付材はがれないように作成してください。

- (2) 返信用に使用するハガキ
受付番号をお知らせするために使用します。85 円の官製ハガキに応募者の住所・氏名を記入して提出してください(官製はがき以外は、受付できません)。
- (3) その他
A4 用紙に記入し応募作品とともに提出してください。
 - ・応募作品の「作品名」
 - ・応募者氏名(フリガナ)、所属先名(学生は、学校名・学年)、電話番号、住所

審査委員(委員は五十音順)

- 委員長 米田 浩志
北海学園大学工学部建築学科 教授
- 委員 赤坂 真一郎
(株)アカサカシンイチロウアトリエ 代表取締役
- 委員 小澤 丈夫
北海道大学大学院工学研究院 特任教授・名誉教授
- 委員 小西 彦仁
ヒココニシアーキテクチャ(株) 代表取締役
- 委員 佐藤 孝
北海道科学大学工学部 名誉教授
- 委員 澤田 貞和
(株)日本工房 取締役会長
- 委員 松田 真人
(株)都市設計研究所 代表取締役

選考経過

- ①一次審査 2025年9月29日(月)～10月3日(金)
一次審査通過者の受付番号は10月10日(金)頃に主催者ホームページ (<https://www.do-kjk.or.jp/>) で発表します。
- ②二次審査 2025年11月5日(水) 11:00～
一次審査通過作品から入選10作品を選出します。
- ③最終審査 2025年11月5日(水) 14:00～
入選10作品から各賞(計7作品)を決定します。
最終審査は「公開審査」とし、当協会8階A会議室で行います。

入賞者発表

- ・2025年11月中旬
入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。
(一社)北海道建築士事務所協会ホームページに掲載し公開
ホームページ URL <https://www.do-kjk.or.jp/>
- ・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」(12月発行)に掲載します。また、最優秀賞受賞の方には、同誌への寄稿をお願いしています。

応募作品の著作権等

- ・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。
- ・応募作品は原則として返却しません(返却希望の場合は、事務局に相談してください)。

提出締切(厳守してください)

- ・2025年9月25日(木) 持参の場合は16:00必着。
郵送の場合も9月25日(木)に間に合う様必着。
(なお、土・日・祝日は受付できません)

提出先

〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地設計会館9階
一般社団法人北海道建築士事務所協会
TEL: 011-788-7650
URL: <https://www.do-kjk.or.jp/>
※持参される方: 平日9:00～17:00受付
但し、締切日は16:00まで受付

第50回記念「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞者名簿

北海道知事賞 (最優秀賞)	小西 神太郎	北海道科学大学大学院2年
一般社団法人北海道建築士事務所協会 会長賞 (優秀賞)	田中 篤史	北海学園大学3年
会長賞 (優秀賞)	納谷 龍輝	北海道建築設計監理 株式会社
奨励賞	神山 巧巳	北海道科学大学4年
奨励賞	小西 悠平	北海道科学大学4年
奨励賞 (共同作品)	関口 蓮 白蓋 裕一	北海道科学大学4年 北海道科学大学4年
奨励賞	田村 さやか	北海道科学大学大学院1年

〔主催〕

(一社)北海道建築士事務所協会

〔後援〕(順不同)

北海道

(一財)北海道建築指導センター

(一社)北海道建築士会

(公社)日本建築家協会北海道支部

(一社)日本建築学会北海道支部

(株)北海道建設新聞社

「環境の入れ子」

小西 神太郎 (北海道科学大学大学院 2年)



最低限の機能を入れた、コの字のプランは、草原を切り取り内包する計画となっている。

生活において食べる、寝る、読書するなど行動が明確なもの意外に、空を眺める、ふらりと歩く、椅子にもたれるなど自然に起こる行為が生活の大半を占めている。

これらは作者が言う名前を持たない行為であり、それを許容する建築が自由な暮らしに繋がるという発想である。

それを構成する建築要素として、

- 一、光、風、熱による多様な空間。
- 二、船のように建築を操縦でき、より身体との距離が近いこと。
- 三、切手の裏に書けるほどの純粋な計画。

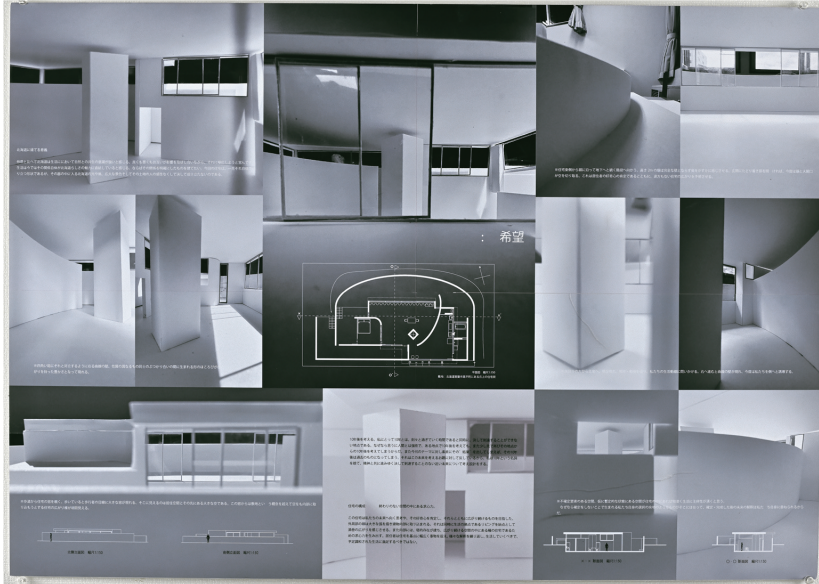
この三つが建築を構成する究極要素であり、それはむしろ無限の美しいシーンと豊かな空間を生み出すことになる。その秀逸な計画が高く評価された。

設計競技審査委員会 委員 小西 彦仁

「：希望」

田中 篤史

（北海道学園大学3年）



作品は、渦巻状の動線による建築的プロムナード(散歩道)のプランで、それを「終わりのない空間の中にある求心力」と述べている。

周りの社会・環境とつながる家屋は、生活拠点であり、巨大な塔的存在が求心力を放つ。それを作者は、家屋に寄り添い、精神と共に進みゆく近い未来の建築として提示した。

この作品には、ル・コルビュジェやミース・ファン・デル・ローエの空間ポキャブラリーが随所に見られ、その読み取りも楽しい。彼らが先導したモダニズムは、建築の重力からの解放とも言える。

塔的存在は、天井に届いておらず重力を受ける柱ではない。その天井とのわずかな隙間が、違和感と同時に浮遊感を生んでいる。それは重力からの解放の比喩であり、家屋の中心と存在を問うている。謎めいた魅力ある作品である。

設計競技審査委員会 委員 佐藤 孝

「島と共にある、ふつうの暮らし」

納谷 龍輝

（北海道建築設計監理 株式会社）



北方の小さな島という厳しくも豊かな環境に対し、この作品は過度な主張をせず、自然と誠実に向き合う姿勢を貫いている。

利便性や先進性といった現代的価値に依らず、「ふつうの暮らし」が本来持つ豊かさを「10年後」に受け渡すため、構成・素材・空間操作のすべてにおいて実直かつ丹念な回答を示している。

住まいの核となる通り土間は、四季と住人、環境を緩やかにつなぐ装置として機能し、離島という特殊な文脈においては長期的に豊かさを支える骨格にもなるだろう。

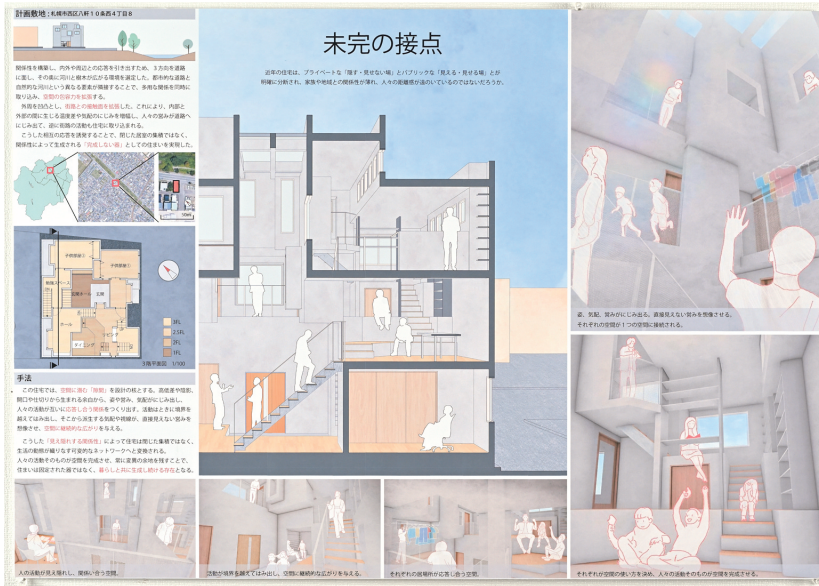
バーチャルなコミュニケーションが生活の一部となりつつある現在において、身体性に根差した空間体験の価値を鮮やかに提示した点が、高く評価された。

設計競技審査委員会 委員 赤坂 真一郎

「未完の接点」

神山 巧巳

(北海道科学大学 4年)



敷地は札幌市西区八軒。三方向が道路に面し、河川と樹木林が付近を流れる。

今の住宅は、家族の関係性や地域性が薄れて人々の距離も遠のいていることから、家族や地域との関係性を取り戻すための空間を内外に作り出そうとしている。

その関係性は暮らしと共に変化・生成し住まいは完成することなく、10年後も未完成で同じだと。

小さな隙間を持つ内部空間（吹抜空間）は毎日異なるシーンをつくる。その変化・生成する暮らしを断面図に、時間を重ねて表現して見事な作品である。

残念なのは外部（周辺環境）との関係性。1階平面図がないので読み取れないが、道路に面した三面がどのくらい地域に開いているのかなどが判るとより良かった。

やはり、平面図は1階から3階までしっかりと描いてほしかった。それによって、断面図の完成度が上がり、多様な内部空間の完成度も理解してもらえ、高い評価が得られたように思われる。

設計競技審査委員会 委員 澤田 貞和

「幸福論」

小西 悠平

(北海道科学大学 4年)



「10年後の家」という課題に対して、設計者は近年頻発する異常気象の常態化を想定し、建築が環境を受け止め、自然を拒むのではなく、その揺らぎに呼応する場を築くことで応えようとした。

敷地には、多種の動物が息する豪雪地帯、岩見沢市郊外が選ばれている。積雪寒冷地において比較的安定した温度を保つ地中に着目し、地中から地上にかけ、異なるレベル差をもつ複数の床を設けつつ空間を連続させた。

片流れの大屋根が、夏は日射を遮り、冬は日射を取り込む。積雪に断熱を期待し、非積雪時には大屋根が受けとめた雨水を貯める水盤を軒先に設ける。ここにつくられた開放的で伸びやかな空間は、魅力的な生活の場となるだろう。

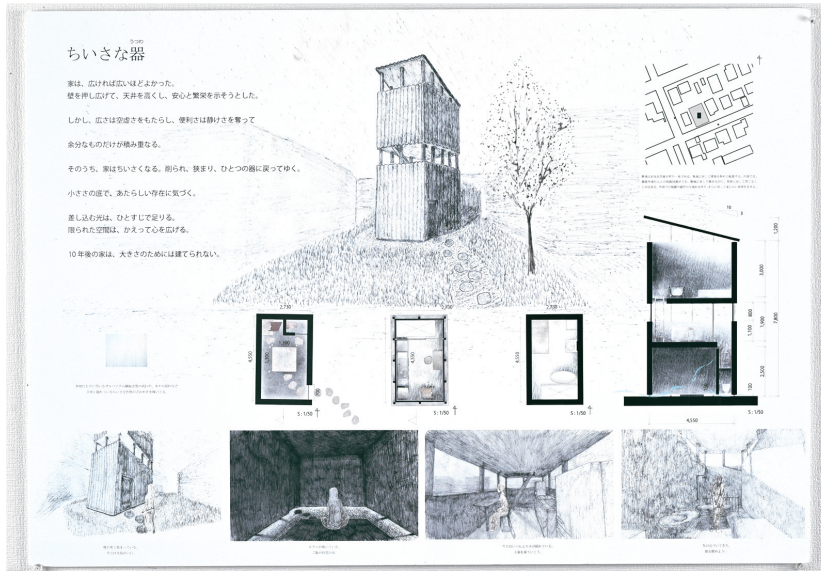
一方で、提案がやや楽観的・牧歌的すぎる印象をもった。地球規模で年々激しくなる異常気象と向かいあおうとするのなら、その厳しさにも耐えうるさらに踏み込んだ知恵を備えることが必要ではないかと思われた。

設計競技審査委員会 委員 小澤 丈夫

「小さな器」

関 口 蓮 (北海道科学大学 4年)
白 蓋 裕 一 (北海道科学大学 4年)

(共同作品)



この作品は、広くて便利な家が空虚さをもたらし、静けさを奪って人間の本質的なものから乖離し、余分なものだけがあふれているという文明批評からスタートをしています。

そこで、1フロアーを3.75坪の最小限矩形とし、1階を思索する光のない空間、2階を食べる為の空間、3階を寝る空間として、無駄なものを取り去った上で、光が心地良いバランスで差し込み、風が空間の縁辺部から通り抜けるしつらえとなっています。

プランから、住み手は一人を想定しているようです。私は、勝手に自分の年齢を反映させて、一人になった高齢者が最後を迎える住まいかなと解釈してしまいましたが、後で聞くと若い独身者を想定しているとのことでした。

いずれにしても、ヒトが一人で(大げさに言えば)宇宙に存在していることを感じさせてくれる、とても哲学的な作品です。携帯を片手に、ものの溢れた現代の我々が果たして豊かなのかどうかを問われており、将来は、本質的な原点に回帰していくのではないかと、或いは回帰して欲しいとの作者の願いがうまく表現された秀作です。

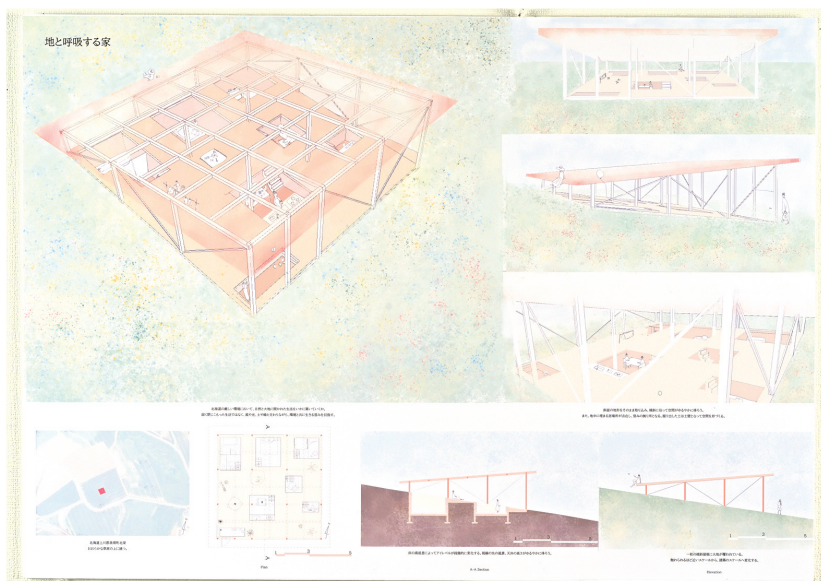
手書きを交えた表現が高い精神性を感じさせてくれます。この精神性をいつまでも持ち続けていただきたい。

設計競技審査委員会 委員 松田 真人

「地と呼吸する家」

田 村 さやか

(北海道科学大学大学院 1年)



敷地は丘の町で有名な上川郡美瑛町北瑛。草原がゆるやかに広がる北海道を代表する風景がある。ここに柱を立て屋根を載せて透明な壁で囲まれた住まいを切り取っている。

見渡す限りの草原の緑と360度の空の青さを満喫し、外部と内部が違和感なく連続している開放的な不思議な住まい。床には穴を空け埋められたような居場所(部屋)が点在しているだけで間仕切りはない。

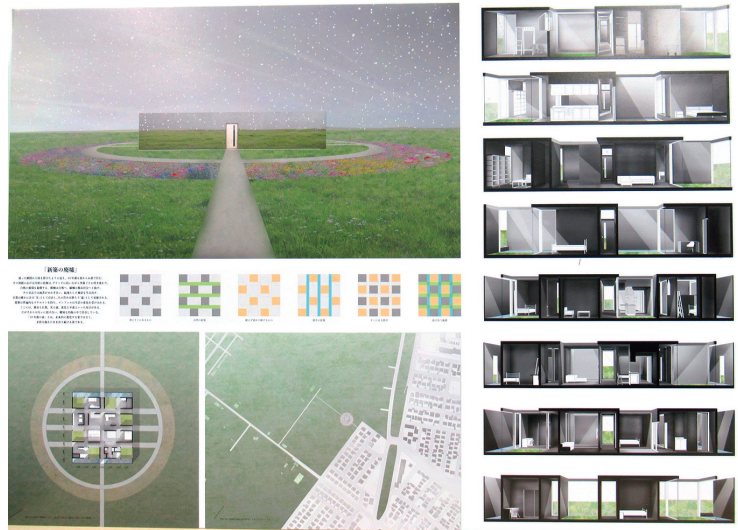
各居場所は求める居心地を勘案し、深さが変わっているようにも見える。ゆるやかに傾斜する床は立つ位置によって、見える高さが異なり楽しさを加えているが、この傾斜する床の心地よさがいまひとつ読み取りづらい。

ところがこの住まい、冬の夜景を想像してみると、真っ暗な大地に灯るあたたかい光の箱が浮かび上がる。漏れる光が周囲を照らす等の説明と提案があるとより良い評価を得られたと思われる。

設計競技審査委員会 委員 澤田 貞和

納谷 龍輝

北海道建築設計監理 株式会社



越智 伊織

北海学園大学 4年



池野 芽久

星槎道都大学 2年



1次審査通過作品

納谷 龍輝

北海道建築設計監理 株式会社



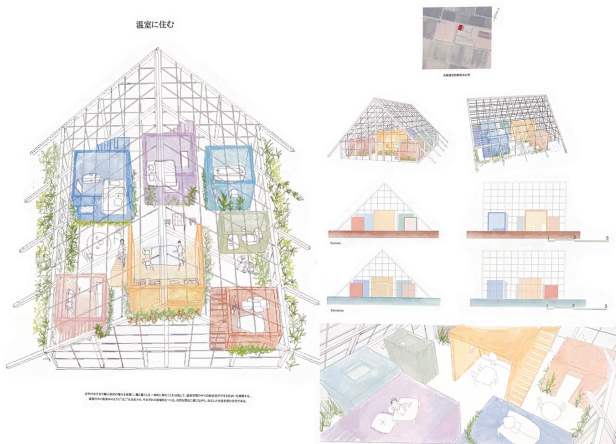
佐藤 沢音

北海学園大学大学院 1年



田村 さやか

北海道科学大学大学院 1年



佐藤 由莉奈

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校 2年



吉田 璃子

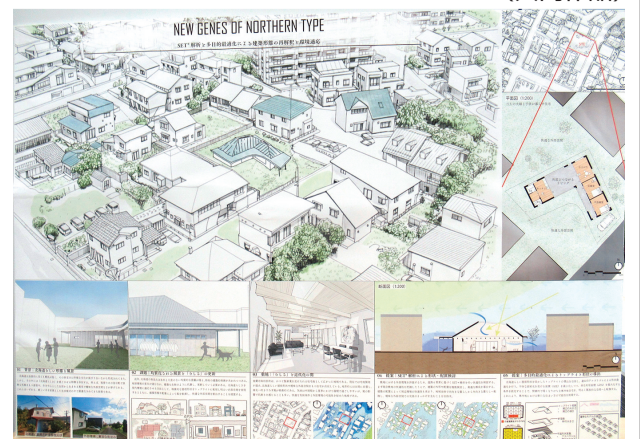
北海学園大学 4年



岩崎 奈歩 (室蘭工業大学大学院 2年)

森 皓星 (室蘭工業大学大学院 2年)

(共同作品)



1次審査通過作品

山下 建

フリーランス



蛸名かの

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校 2年



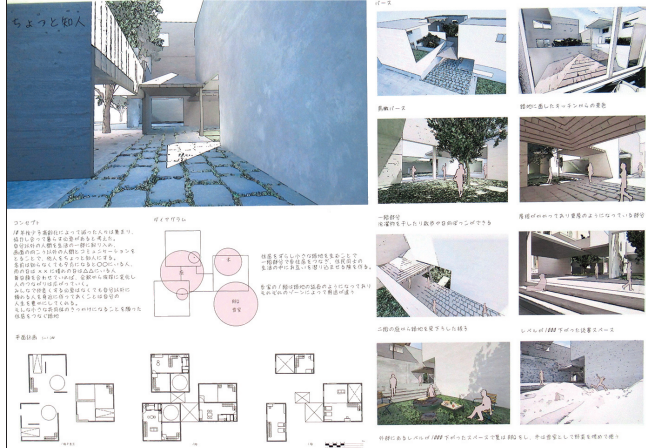
菅野文音

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校 2年



小飼かのん

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校 2年



表彰式



入賞者・審査委員との座談会

第50回記念「北の住まい」住宅設計コンペ 総 評

第50回を迎える北の住まい住宅設計コンペは、1969年に第1回がスタートし、今年で56年を向かえる。今回の開催回数50回と経過年数56年との違いは、かつて隔年開催の時期もあり同じにはなっていない。しかし、いずれにせよ、社会に開かれた半世紀を超える設計競技（コンペ）としては、全国的に見ても長い歴史を有し、北海道建築界において極めて意義深い場となっている。

今回、50回記念の開催にあたり、表彰名に北海道知事賞（最優秀賞）と北海道建築士事務所協会会長賞（優秀賞）として発信力を高めることとした。また、課題は「10年後の家」とし、現在に近い未来を前提に北海道の住宅の可能性を問いかけ、設計コンペにおいて建築の創造性を作品に投影することは当然のことながらも、10年後のリアリティを想定することで、臨場感のある作品が期待された。

今年度は9月25日に応募を締め切り、63作品の応募があった。ここ数年の開催においては際立って多い数である。その後、9月29日から10月3日の間で第一次審査を行った。

この審査においては7名の各審査委員が、7票を持って各作品を選出した。1票以上の投票があった作品を第一次審査通過作品とした。今年は20作品が選出された。

その後、11月5日午前中に第二次審査会が開催され、各作品の内容を再確認した上で審査を行い、入選10作品を選出した。同日午後からは公開の最終審査会が開催され、各作品の講評を行い、複数回の投票によって入選10作品から各賞の7作品を選出した。今年は初期段階から評価が割れたため、各賞の選定には多くの時間を要し、審査委員間で度重なる議論が行われた。

北海道知事賞（最優秀賞）を受賞した「環境の入れ子」（小西案）は、コートの扱いが特徴的である。一般的な内部領域化した外部空間とは異なり、アルミのカーテンによって夏の季節に閉じる工夫をしていた。北海道の近年の夏の暑さを踏まえれば、このような空間の提示は極めて現実的である。特に、閉じられたコートにトップライトから間接光を浸透させる操作が秀逸であった。

そして、北海道建築士事務所協会会長賞（優秀賞）を受賞した「：希望」（田中案）は、モダニズム的な空間構成が印象的であった。一見抽象度が高い建築ではあるが、周囲に対して建築高さを抑えたスケールの操作、そして内部空間の流動性や象徴的な柱の配置は、生活者の行動や感情を受け入れる工夫でもあった。本来的な建築の目的性に真摯に向き合う姿勢が評価できる。もう一つの同賞受賞の「鳥と共にある、ふつうの暮らし」（納谷案）は、具体的でかつ完成度の高い作品であった。周辺風景と調和した家の佇まいや空間の開放性とそこにあるリアルな暮らしが伝わってくる。図面からは制作者の住空間に対する誠実性が読み取れ、今後の実現を期待したい作品であった。

これら上位入賞作品に加え、各奨励賞作品4点もそれぞれに特徴を有していた。さらに設計の意志が作品に反映されていれば、上位入賞も十分に狙えた作品であった。

今回、各作品が提示した10年後のリアリティは想像以上に幅が広く、それぞれの近未来に対する制作者の建築観が表現されていた。建築において、変わるものと変わらないもののバランスは、各制作者の解釈とも言えるが、このバランスへの問いは、過去から現在に至るまで続く建築設計の根源的な探究姿勢でもある。半世紀以上にわたるコンペの蓄積と、今回50回記念として得られた成果を礎に、今後も「北の住まい」の可能性をさらに探求していくことを期待したい。（了）

設計競技審査委員会 委員長 米田 浩志

「環境の入れ子」

第50回記念「北の住まい」住宅設計コンペ北海道知事賞受賞者（最優秀賞）

小西 神太郎（北海道科学大学大学院2年）

例えば、栓抜きは単純だ。栓を抜く以外の用途はなく、どんなに使い道を探ろうとも皆目見当はつかず、ビール瓶を開ける時だけ雑に取り出して、使い終わったらそれっきり。また調理器具の奥のほうに埋もれていく。

では囲碁は単純だろうか？ 子供でもすぐ理解できる簡素なルールであるが、発祥から4000年の歴史があった今でもなお必勝法はなく、その奥深さが人を魅了し続けている。囲碁は無限の奥深さ・複雑性を内に秘めていると言えよう。栓抜きと同様、一見簡素な形式なのに、どうやら囲碁は単純ではない。

となると、「見た目が簡素であること」が単純さの最たる特徴ではないらしい。特筆すべきは、その簡素さの奥に“複雑性”を持っているか否かだ。単純さとはつまり「複雑性がない簡素さ」といえる。

そしてこの世には囲碁のように見た目は簡素けども、その内に無限の複雑性を秘めているものがある。私はそれを「純粹」と呼びたい。純粹さとはつまり「複雑性が“隠れている”簡素さ」だ。ここにおいて単純と純粹は、明確に線引きされる。

ところでこの世は、栓抜きのような建築が社会を占めている。一つの機能を満たすためにつくられたような単純な箱の連続。経済合理主義が産み落としたそれらは、私たちの生活の豊かさを奪うこととなった。

メタファーとして、囲碁のような、純粹な建築が必要ではないだろうか。一見簡素ではあるがその内に無限の複雑性を宿し、訪れるものが深く見つめていけばいくほど、その複雑性がめくるめく開示されていくような、そんな建築があるべきではないだろうか。囲碁がそうであるように、飽きることのない、静かな驚きと共に更新され続ける豊かな日常がそこにはある。

「純粹な建築を目指して」

そんな、私の掲げる設計理念を三つの指針をもとに結晶化させたものが今回の作品である。

一：「多様な光、風、熱を招来すること」

例えば、森に壁はない。木々の重なり、湿った所、乾いた所、光の差す場所、暗い場所。空間ごとの状態や距離感の変化で、場所が雰囲気分で断される。物理的な壁で断されないからこそ、そこには相互に絡み合う状態の複雑な関係が形成されている。建築の内部空間においても、自然現象の複雑さを招き入れ、そんな森のような状態をつくる必要がある。

二：「船のように、それらを操縦できること」

建築と身体との距離感が適度でないといけない。建築が身体への延長にあることを認識させることで、空間に対して、生活者が主体性を持つきっかけとなる。一で掲げた多様な現象の複雑さへと、自身の感覚を向けていくためのきっかけとなる。

三：「図式を、切手の裏に描き切れること」

やはり簡素にみえなくてはならない。無理をしているような形にみえてはならない。そして単純であってもならない。多様な複雑性をまとめ上げる洗練された一手、建築全体を、閃く稲光が一筋に貫くが如く、鮮烈で革新的な一手を持つ純粹さがなければ、それは不完全だ。

私は単に形式的な簡素さを追求しているのではなく、複雑性をうちに秘めた、洗練された一手の結果としての簡素さを、「純粹」を、追及している。それはミニマリズムの本懐であるともいえる。

Do not say a little in many words, but a great deal in a few.
Pythagoras

私の根源は、この至言に尽きる。

今回の受賞に関して、新しいものを創造する人間は常に（比喩として）10年後へ向けて創造するわけなので、胸を張って今まで通り作れば良いと思い、のびのびと取り組みました。自身の設計思考を振り返り結晶化させた作品に対して、最優秀賞を頂けたことには大変うれしく思います。ありがとうございます。精進します。

